

先週私たちは、信仰の継承が、「神様の約束による」ということを見ました。神様は、アブラハムを選ぶことで、彼に「あなたの子孫によって地のすべての国々は祝福を受けるようになる…」(創 22:18)と約束されたわけですが、それは実に、アブラハムの子孫として来られた、主イエス・キリストによって実現へと導かれたのです。というのも、主イエスこそ、すべての人をその罪と滅びの中から救い出し、神の子どもとしての特権、つまり、永遠の祝福を与えるために、神様から遣わされた救い主だからです。

主イエスは、自らが十字架にかかり、罪人のための贖いの死を遂げることで、また三日目に、死人の中からよみがえられることで、ご自分を救い主と信じるすべての人に、救いを約束しておられます。なぜなら、主を信じる者はみな、主と一つにされるからです。そして、そのようにして約束の子孫である主と一つにされる者はみな、アブラハムの子孫となり、神様がアブラハムに約束された祝福を受け継ぐ者となるからです。信仰の継承は、実にそのようにして神様ご自身によって始められました。それゆえに、やがての日にそれを完成されるのも神様です。その約束の子孫である主イエスを通して。

ですから、私たちとしては、「自分が何とかしなければ、信仰が途絶えてしまう。私たちの教会がどうにかなってしまう」と、必要以上にプレッシャーを覚える必要はありません。主は、ご自分が何をしておられるかを知っておられ、その救いのご計画に基づいて、人々を救い(信仰)へと導かれるからです。そのことを知り、また、その中にすでに自分自身が含まれていることを感謝して、この主にいつも信頼して歩むこと、それが私たちに求められていることです。そのように主イエスと共に歩むなら、主がご自身の御霊とみことばをもって、私たちを助けて下さいます。私たちをして、いかなる時にも主をあがめ、主を証することができるためです。

さて今日は、信仰の継承が、「信仰による」ということを共にみことばから学びたいと思います。そんなこと、あえて言う必要のないことかもしれません。信仰を継承していく者に、信仰がなければ、それを継承することはできないからです。では、私たちの信仰とは、どういうものですか? 「信仰」とは、私たちには実に使い慣れたことばですが、あなたの信仰は、今、生きて働いていますか? それとも、それは過去において、主を信じると決心した時に必要なものであって、今の歩みにはあまり影響を及ぼさないものでしょうか?

「信仰」とは、言い換えるなら「信頼」ということができます。つまり、それは継続的なものであり、常に今という時、主に信頼することが求められるのです。いかがですか? 今日、あなたは主を信頼するゆえに、主のみことばに聴くこと、そして、それに従うことが、あなたにとっての喜びですか? あなたの考え、日々の歩みの中心にあるもの、それは主のみことばですか? もう一度、今日の箇所を読みます。使 3:22-23 「モーセはこう言いました。『神である主は、あなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。この方があなたがたに語ることはみな聞きなさい。23 その預言者に聞き従わない者はだれでも、民の中から滅ぼし絶やされる』」。

これは申命記 18 章 15 節と 18 節からの引用ですが、ペテロは、このところを引用し、モーセは、主イエスを指して、このように語ったと言いました。ここで注目したいのは、モーセが「私のようなひとりの預言者」と語っているところです。モーセの後、主イエスが来られるまで、実に多くの預言者たちが神様によって遣わされましたが、モーセのような預言者は、主イエス以外には起こりませんでした。申命 34:10に「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。…」と書かれてある通りです。

では、モーセとはどういう人でしたか? そのことについて、モーセの姉ミリアムと兄のアロンが、モーセがめとっていたクシュ人の女のことで、彼を非難した時、主が彼らに語られたところから見ます。民 12:6-8 「わたしのことばを聞け。もし、あなたがたのひとりが預言者であるなら、【主】であるわたしは、幻の中でその者にわたしを知らせ、夢の中でその者に語る。7 しかしわたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者である。8 彼とは、わたしは口と口とで語り、明らかに語って、なぞで話すことはない。彼はまた、【主】の姿を仰ぎ見ている。なぜ、あなたがたは、わたしのしもべモーセを恐れずに非難するのか」。

以前、ヘブル書を開いた時に、モーセのことが、主イエスとの比較の中で記されているのを見ましたが、モーセをして、彼が「私のような預言者」と言った時、それは主イエス以外にはだれも考えられないのです。もちろん、そこで意味していること、それは主イエスがモーセと同じ、または彼よりも劣るということではありません。むしろ、主は、モーセと比べられないくらい、遥かに優ってすばらしいお方です。なぜなら、モーセはしもべとして、神の家全体のために忠実でしたが、主イエスは御子として、神の家を忠実に治められるからです（ヘブ3:5-6参照）。ですから、モーセが命じたように、私たちは主イエスに聴き従うべきです。

では、どうですか？新約の時代の私たちにとっては、そのように理解することができますが、モーセがこのように語った時、主はその後すぐ来られましたか？もしそうであったなら、モーセは主イエスに民を任せることができたわけです。でもそうではなかったゆえに、彼は自分に与えられた指導者としての責任を誰か他の人に引き継ぐ必要、つまり、彼なりに信仰の継承をする必要がありました。

もちろん、モーセの場合は、約二百万人もの民の指導者でしたから、必ずしも私たちの状況に当てはまるわけではありません。でも、信仰の継承における世代交代ということを考えるなら、ここからも学ぶことができると思うのです。では皆さんにお聞きしますが、モーセに代わって、イスラエルの指導者になったのは誰ですか？モーセの死後、誰が荒野から約束の地カナンへと民を導き入れましたか？ヨシュアです。

民 27:18-20 「【主】はモーセに仰せられた。『あなたは神の霊の宿っている人、ヌンの子ヨシュアを取り、あなたの手を彼の上に置き。19 彼を祭司エルアザルと全会衆の前に立たせ、彼らの見ているところで彼を任命せよ。20 あなたは、自分の権威を彼に分け与え、イスラエル人の全会衆を彼に聞き従わせよ』」。

私たちはこのことを知っているのです、特に何の問題もなく、受け入れることができますと思います。でも、どうでしょう？アブラハムへの祝福の約束を受け継いだのが、その息子イサクであり、またそれはイサクから彼の息子のヤコブへ、ヤコブから息子のユダへ、という流れからして、なぜこの時は、モーセから彼の息子に、民の指導者としての権威が継がれることがなかったのか、と疑問に思われる方はいませんか？それはモーセに子がいなかったからですか？

出エジ 18:3-4 「そのふたりの息子を連れて行った。そのひとりの名はゲルシヨムであった。それは『私は外国にいる寄留者だ』という意味である。4 もうひとりの名はエリエゼル。それは『私の父の神は私の助けであり、パロの剣から私を救われた』という意味である」。モーセには、二人の息子がいました。ただ彼らについては、聖書ではほとんど語られていないので、何とも言い難いというのが実際のところです。確かなことは、彼らのうちのどちらかではなく、ヨシュアがモーセの後継者になったということです。なぜですか？それは、神様の選びが、モーセの従者であり、信仰の人であったヨシュアの上にあったからです。

聖書を見ると、イスラエルの民が、アマレク人と戦った時、ヨシュアがその戦闘を指揮し、勝利を治めたことが記されています（出 17:8-13）。また、モーセがシナイ山に登り、十戒の石の板を授かった時にも（どこまでかはわかりませんが）ヨシュアはモーセに同行したのです（出 24:12-13）。そして、モーセが主の約束の地カナンを偵察するために、十二部族から、そのかしら達を遣わす時、これは軍事的指導者であったと思われませんが、ヨシュアもエフライム族のかしらとしてそれに加わりました。

そのようにして十二人の斥候たちは、カナンの地を偵察に行ったわけですが、その際、ヨシュアとユダ族のかしら、カレブ以外の者は、みなカナンの地について「その地は、その住民を食い尽くす地だ」といって、イスラエル人たちに悪く言いふらしたのです。それは彼らが、そこに住む背の高いカナン人たちを恐れたからです。その時、ヨシュアとカレブは、その地を取ることができる、神様がともにおられるから、と言いました。

民 14:7-9 「イスラエル人の全会衆に向かって次のように言った。『私たちが巡り歩いて探った地は、すばらしく良い地だった。8 もし、私たちが【主】の御心にならば、私たちをあの地に導き入れ、それを私たちに下さるだろう。あの地には、乳と蜜とが流れている。9 ただ、【主】にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし【主】が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。』」。

このヨシュアとカレブのことばに全会衆がどう応答したかご存知ですか？民は、彼らを石で打ち殺そうと言いだしたのです。その結果、主は、カナンの地を悪く言いふらした者たちを、疫病で打たれました。また二十歳以上の者で、主につぶやいた者はみな、その罪を負い、荒野で息絶えると告げられたのです。ただ、彼らが自分たちの妻子はさらわれてしまうと云った、その彼らの妻子たちを主は約束の地へと導かれます。信仰の人ヨシュアをモーセの後継者として立て、彼を用いられることを通してです。

では、ヨシュアを通してカナンの地を征服していったイスラエルの民は、そこで安息を得ましたか？その後、彼らは、不信仰、不従順を止め、主だけを愛し、主のみことばに聴き従って、主の祝福と平和の中を歩んだでしょうか？ヨシュアの死後、彼らは主を捨て、おのおの自分勝手な道、偶像礼拝の道へと向かって行きます。ですから、ヨシュア記の後、士師記が続くのです。そして、その後は、イスラエルの国にサウル王、ダビデ王といった王たちが起こります。自分たちを治める者として、民が神様ご自身ではなく、他国のように人間の王を求めたからです。

ですから、ヘブル 4:8 にこう記されています。「もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであったら、神はそのあとで別の日のことを話されることはなかったでしょう。9 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです」。モーセの後継者として、ヨシュアが選ばれ、彼の導きのもとで、確かに民は約束の地カナンへと入っていくことができました。でも民の問題、つまり、その内側の自己中心や罪の問題、そこからくる不信仰、不従順の問題は、それによって解決されることはなかったのです。ヨシュア自身は、「私と私の家とは、主に仕える」（ヨシュア 24:15）と云って、主への信仰を告白しつつ、地上の生涯を百歳で終えました。でもイスラエルの民は、主に仕える、と繰り返しヨシュアに云えながら、結局は、主を捨てて偶像礼拝の道へと向かっていくのです。

モーセは、「その預言者に聞き従わない者はだれでも、民の中から滅ぼし絶やされる」と云いましたが、「その預言者」が「主イエス」であるのなら、置き換えると「主イエスに聴き従わない者はだれでも、民の中から滅ぼし絶やされる」となります。こういうと、主に聴き従わない不信仰で、不従順な者は、決して主からあわれみを受けることなく、ただ滅びだけが彼らを待ち受けているかのように思われるかも知れません。でも父なる神様は、イスラエルのそのような現実、また私たちも彼らと何ら変わらないことをご存知で、モーセのようにご自分と口と口で語られる方、つまり、ご自分の御心を完全に知っておられる愛する御子イエスを遣わして下さいました。彼の十字架の死、その身代わりの死によって、私たち罪人を滅びから救い出すためです。

ですから、信仰の継承は、この主イエスへの信仰によります。もっと言うと、それは信仰の創始者であり、完成者である主イエスの父なる神様への信仰によるのです。私たちは誰も、自分の信仰を誇るような者はいません。でも今、確かに主への信仰をいただいているのです。それは、信仰の小さな私たちを、しっかりと捉え、引き上げ、導いて下さる信仰の大きな主がおられるから、主によって支えられているからです。この主が、父なる神様への全き信仰（信頼）により、十字架の死に至るまで従順を全うして下さいましたゆえに、私たち自身は完全とは程遠い者ですが、それでも、この主によって罪赦され、永遠のいのちをいただいている、という救いの望みと確信を持ち続けることができるのです。この主イエスの信仰によって、そして、この方への信仰によってです。この恵みを人々に、特に次世代の人々に継承していこうではありませんか。